時事新報

明治十九年一月十九日　火曜日
舊乙酉十二月十五日　(巳、卯)
日出午前七時十分　日入午後五時十三分
月出午後四時十四分　月入午前五時三十三分
滿潮午前四時零九分　午後四時三十九分
(西暦一千八百八十六年)

時事新報定價

一枚金三錢〇一箇月前金六十五錢〇三箇月前金一圓八十錢〇六箇月前金三圓四十錢〇一箇年前金六圓五十錢〇郵便税一箇月金廿六錢一箇年金三圓十二錢〇左ニ掲クル各地ニ於テハ該地賣捌所ヨリ遞送無料ニテ配達致候(但本社ヨリ直接郵送スルモノハ此限ニアラズ)

東京　横濱　横須賀　從神奈川至小田原驛　函根七湯　大坂
京都　大津　神戸　尾ノ道　福山　笠岡　岡山　廣島
和歌山　德島　高知　下ノ關　名古屋　岐阜　岡崎　豐橋
四日市　津　松坂　山田　仙臺　福島　二本松　石ノ巻
函館　青森　弘前　宇都宮　高崎　八王子　千住　草加
越ヶ谷　粕壁　杉戸　幸手　久喜　關宿　千葉　登戸
寒川　佐倉　東金　市川　八幡　船橋
其他同地近傍配達便宜ノ個所ハ同シク遞送料不申受候

時事新報廣告料(前金)一行ニ付

一行廿四字詰	一日限	二日以上六日迄	七日以上十五日迄	十六日以上卅日迄	卅一日以上
自一行至十行	十錢	八錢	七錢二厘	六錢八厘	六錢四厘
自十一行至三十行	九錢	七錢	六錢三厘	五錢九五	五錢六厘
自卅一行至五十行	八錢	六錢五厘	五錢八五	五錢五厘	五錢二厘
五十行以上	七錢	六錢	五錢四厘	五錢一厘	四錢八厘

時事新報

加藤弘之君日本人種改良論の辨を辨ず

高橋義雄

一昨年九月拙著日本人種改良論の出版あり人種改良を習養遺傳の二ヶ區別し習養の部にては体育を勸め衣食住の品位を高むるとを勸め遺傳の部にては日本人と西洋人との雜婚を勸めたるに世上の學者中其利害を注目して新聞紙に演説に之を議する者少らず本月九日上野公園内文部省の官舎にて開きたる學士會院會員の演壇にては加藤弘之君日本人種改良論の辨と題する演説あり專ら拙著中雜婚論の一段を辨駁したる者の如し因て本月十二日以下四日間の東京日々新聞に掲載ある右演説筆記を見るに先づ衣食住改良の事は善き事なりとて之を贊成し次に雜婚の事に移り歐洲諸學者の説を舉けて雜婚は子孫の増殖に妨けなき、雜婚は人種の身體上に良結果あり、西洋人と日本人との雜婚は良質の子を得るの見込あり云々と述べ是迄の處は原案に關るゝと思へば却て觸れず蜻蜓點水の論法にて説き來り扨て最後辨駁の一段に至り其大略左の如し

人種改良論者の所謂改良は改良に非ず改良とて或る部分の變換を止まり其物の全体を變革するの義に非ず然るに今改良論者は我人種と改良せんとするに洋人の血脈を吾人の体内に多からしめんとするものなれば即ち人種變更なり愛ホルカス氏の白人と黄人との合の子は母に似ると云へる説に基き試に日本の男兒と西洋の婦人と結婚して男子を産ま此兒又更に他の洋婦と婚し此比例にて進まば年數二百八十年にして黄色人種の分子の滅殺を來すものなり此割合にて幾數百年を經過せば黄色人種は全く其分質を止めざるに至る所と抑も此日本國は此現在せる我々人民の組織せるものなれば純粹なる日本人が其働を以て國家の隆盛を致せばこそ日本人の面目なれ異人種の國と爲りては何程昌盛なるも何の光榮かあらん達し宇內の事ば優勝劣敗の眞理に支配せらるゝものなり從來西洋人が宇內の各地に渉りて居を占むるに就て其地の下等人種は爲めに絶滅したるの事例あり日本人種もしけきば絶えんと致方なき次第なり又人間が此世の中に立つて万事を爲すは只我と云へる者れ利益を計るが爲めのミ今の日本人種は吾人より見れば即ち是れ大なる我なり然るに今改良論者は此大切なる我を亡ぼして日本の隆盛を謀らんとす予其何の意なるを知らざるなり斯く云へばとて予は國土に戀々して云々するに非ず土地の如きは何處にても差支なき願ふ所は只我日本人の開化發達ゝ在るのミ

以上加藤君の辨駁中先づ人種改良と云ふ其改良は文字の變更と云はねば穏かならずとの申分なれども元來改良とは變更に達するの手順なり改良の手順を重ねて或る部分の變換を屢々なさば遂に其物の全体とも變ずるものなり人種改良は目的にて數百年間雜婚を重ぬれば或は人種を變更する所もある可しと雖ども此間懸したるものより良きものに改まるの手數を稱して改良と云ふ何の不可あらんや此邊の言葉咎めは結局水掛論となるて姑く置き扨て君の説にて數百年を經過せば黄色人種は全く其分質を止めざるに至る可きとは餘り我儘の論法なり君は唯日本の男子と西洋の婦人と結婚し其兒々又西洋の婦人と婚する割合より推算したれども雜婚となれば日本の婦人が西洋男子に婚し其合の子の娘が又西洋男子に婚するともある可し此場合は君の例と反對にて二百八十年目に西洋人が日本人に化するとあらん此等は一偏極端の事例にして論外なれども雜婚盛に行はるれば日本西洋の男女種々に結婚して雜種を生じ雜種或は雜種と婚し或は純粹なる人種と結婚して諸所人種の血脈を廣き區域に分布し人種と改良すると同時に其血脈を永傳するを得べし即ち日本人の血脈を一升と假定し之を西洋人一升の血脈に混ずれど二升は一升なれども其一升は二升の間に分配し日本人の血脈は日本國中に限らず外國までに傳播して日本人種は分子を増加するやも知る可らず此等の點に就ては余は唯君の再考を請ふのみ

(以下次號)

官報

○内務大臣の達　一昨十六日内務大臣より同省各局課へ左の通達せり

各局課判任以下の儀今般減少の上指定したる人員を以て假りに定員と相心得事務を取扱ふへし尚は繁文を省き簡易に就き處務順序の整頓するを待て更に人員を確定そべし此旨相達す

○辭令

依願東京大學御用掛兼勤被免(一月十六日内閣)　軍醫監　石黒忠悳

(各通)
大藏大書記官　石渡貞夫
同權大書記官　立田彰信
仝　宍戸昌
仝　海老原和一
大藏少書記官　天野仙輔
仝　鷲野九郎
仝　吉田豊文
仝　吉村正義
仝　葦原正風
仝　高藤三郎
大藏權少書記官　金田清風
仝　野中準

仝　江川英武
仝　服部作太郎
三等主税官　桑山敏
大藏省准奏任御用掛　小浦鎌三郎
仝　池田成章
仝　松倉恂

非職被仰付(一月十六日大藏省)
(各通)
大藏省准奏任御用掛　一川直之
仝　平田八郎

依願御用掛被免(一月十六日大藏省)
官報々告主任被仰付(同)　大藏少書記官　盧高朗
印刷局勤務被仰付(同)　大藏四等技師　篠崎政恭
東京大學御用掛兼勤被免(一月十六日文部省)　非職文部省御用掛　古賀護太郎

○財政　通貨ノ事歴　(前號ノ續)

明治三年舊藩札流通額概數表

舊藩々札ノ假名ハ銀匁アリ錢何貫何百何十文ノ稱アリ又或ハ米何石何斗何升札ノ目アリ或ハ何兩何分何朱ノ稱アリ區々錯雜亦甚シ今此ノ表ニ於テハ觀閲概括ノ便ヲ圖リテ政府カ公定セシ所ノ舊藩札價格新貨比較表ニ據リテ一々其ノ流通額ノ概數ヲ新貨ニ換算シタル者トス

順次	舊藩名	札ノ名稱	明治四年辛未七月流通額概數
一	嚴原	金銀錢札	五八、六四七、三六八円
二	同分管飛地	銀札	七七、五九四、二二八
三	岩國	錢札	二二五、九四九、〇二七
四	今治	銀札	六二、一五九、六一三
五	犬山	錢切手	未詳
六	出石	銀錢札	八四、二八〇、〇〇〇
七	岩村	假切手	未詳
八	今尾	預券	未詳
九	飯山	錢札	未詳
十	飯野	銀錢札	四〇一、八〇一
十一	伊勢崎	楮幣	未詳
十二	泉	錢札	三、七五八、八〇〇
十三	飯田	金錢札	未詳
十四	岩村田	金錢札	未詳
十五	花房	米切手	未詳
十六	半原	錢札	未詳
十七	林田	銀錢札	一三、二六九、五八一
十八	濱田	銀札	四七、七七八、九五二
十九	二本松	錢切手	未詳
二十	庭瀬	銀永錢札	四、八四五、四一〇
二十一	新見	銀札	六、一八二、〇〇〇
二十二	西大路	錢札	六、〇一九、四三三
二十三	西端	金錢札	未詳
二十四	本庄	錢切手	未詳
二十五	堀江	金錢札	一、三四八、五一四
二十六	鳥取	銀札	六八〇、五一三、八二八
二十七	同分管飛地	銀札	三、五六六、三六一
二十八	德島	銀錢札	一、(三三七)五〇一、二三一
二十九	富山	錢札	九七、八六三、四三六
三十	豐津	永錢札	二六八、〇五〇、五八五
三十一	豐橋	米預札	四八、六〇二、一七六
三十二	豐浦	銀札	一七八、四六一、三三七
三十三	鳥羽	銀札	七三、六五八、五六〇
三十四	豐岡	米預切手	三三、九三七、四二七
三十五	千束	米預切手	五、〇六四、七二九
三十六	沼田	楮幣	一一、二三六、九四〇
三十七	同分管飛地	錢札	一七、九三〇、六三三
三十八	岡山	銀札	八六七、〇二〇、六九一
三十九	小濱	銀札及錢札	五四、〇二六、九七八
四十	忍	同	五三、九四三、七〇五
四十一	同分管飛地	同	六三、九四四、〇二四
四十二	大垣	預永錢小切手	三五、四六五、〇一六
四十三	小田原	錢札	未詳
四十四	關	金銀札(四萬千四百十兩未滿新谷通用ノ分)	一三四、〇七六、〇〇三
四十五	大洲	錢札	一四八、〇〇一、八〇〇
四十六	飫肥	銀札	八一、七八四、五〇五
四十七	岡野	同	二四、九〇一、六八四
四十八	大野	錢札	五四、〇六一、〇三六
四十九	大村	錢札	未詳
五十	大田[illegible]	金札	未詳

順次	舊藩名
五十一	大津
五十二	小[illegible]
五十三	岡田
五十四	小野
五十五	小城
五十六	荻野山中
五十七	和歌山
五十八	同分管飛地
五十九	金澤
六十	鹿兒島
六十一	高知
六十二	高知預所伊[illegible]川ノ江
六十三	川越
六十四	笠間
六十五	唐津
六十六	龜山
六十七	龜岡
六十八	加納
六十九	鴨方
七十	刈屋
七十一	勝山
七十二	神戸
七十三	加知山
七十四	柏原
七十五	米澤
七十六	淀
七十七	吉田
七十八	與板
七十九	高田
八十	高松
八十一	大聖寺
八十二	高崎
八十三	館林
八十四	同分管飛地
八十五	龍野
八十六	高槻
八十七	高遠
八十八	田邊
八十九	高島
九十	館[illegible]

(以上三件本年

雜報

○農水產物陳列品　列品は彌よ博物局の
賣却品のみは其儀よ
都合なりと
○電信往復の神速
あり一は午後二時五
十時十五分其返信を
ハーブルーグへ向け
即ち甲は八時十分間
なり云々(本年一月十
○東洋の小ロビンソ
田中鶴吉が米國桑港
ツクアイランドの製
明治四年の暮れの事
掛け九年が間は專ら
念も無く此時限中は
に艪出したるとのあ
見ずと雖も然れ共鶴
此處にて漸次に太く
難新辛苦一ヶ此九箇
十九年の今日此土人
も曾ふ此より起りた
社に這入りたる當初
りハ一文の手當も受
れて日夜立働く内立